

# 徳島大学の 学生ボランティア

## ボランティア 活動の意義

副学長理事 教育担当  
高石 喜久(たかいしよひさ)

日本でも阪神・淡路大震災を契機に沢山の人がボランティアに参加するようになりました。私も阪神・淡路大震災の時、大学内の有志教員の発案で急遽グループを編成し、焼きそばを淡路島の避難所に届けました。当時私は学生委員をしていましたので、薬学部

の学生さんと参加しました。トラックに焼きそばを作る道具一式を積み込み淡路島の海岸で焼きそばを作り、避難所で被災者の方々に焼きそばをお渡ししました。被災地の悲惨な状況と被災された方の表情に接し、ただ「お召上がり下さい」としか言えませんでした。温かい食べ物を食べて下さいとの気持ちでしたが、言う言葉が失っていました。その当時は自分

がボランティア活動に参加している意識は無く、ただ、自分には何が出来るのか、今、自分が出ることをしなくてはいけないと思っただけでした。たった一食の焼きそばで被災された方々のお役に立てたかどうか、今でもわかりません。ただ、その時、自分で出来る何かをしなくてはいけないと思っただことは事実で、これが私のボランティア経験の原点です。

大学の学生さんも数多くのボランティア活動をしています。頼もしいことだと思っています。ボランティアは個人の自発的な自由意思に基づいて行われる活動で人から命令されるものではありません。社会にある様々な課題への関心から始まる活動で、その活動を通じて他の人とかかわり、新たな人間関係が育まれていきます。

ボランティア活動を通じ大学の学生さんが大きく成長して行くことを期待するとともに、大学としても支援体制を整えて行きます。

## 福島原発災害における 住民支援活動

総合科学教育部 地域科学専攻  
博士前期課程2年 坂口 由貴子(さかぐちゆきこ)

### はじめに

東日本大震災に伴う原発災害に対して、徳島大学では2011年4月に被災地に入り、緊急被ばくスクリーニング活動を開始しました。9月には学長裁量で福島住民支援プロジェクトを立ち上げ、「ふくしま・とくしま、ともに歩もう」を掲げて、住民に寄り添った支援活動を継続しました。そして2012年5月には福島県白河市と災害復興に向けた連携・協力に関する協定を締結し、地域住民、事業者、自治体職員の放射線に対する不安軽減活動を実施してきました。

### 福島県伊達市特定避難勧奨地点での支援活動

伊達市は福島第一原発から70kmほど離れた福島県中通りの北東部に位置しています。伊達市の特定避難勧奨地点(原発事故発生後1年間の積算放射線量が20ミリシーベルト(※1)を超える)と推定される地点)として定められた地区(2012年12月解除)で、2011年10月から活動を始めました。住民の協力のもと、汚染調査をしてきました。活動開始当時は屋外での空間線量率(※2)が毎時1.5~2.5マイクロシーベルトであった場所も現在では毎時0.5~1.5

マイクロシーベルトに下がっています。活動拠点(写真1)は山林に囲まれた所なので空間線量率が高くなってしまうですが、屋内では毎時0.3~0.5マイクロシーベルトとなっています。

### 福島県白河市での支援活動

白河市は福島第一原発から80kmほど離れた福島県中通りの南部に位置した東北地方への玄関口です。原発災害当時、関東方面へと南下した放射性プルーム(※3)が風向きの変化によって中通り地方に沿って北上した際に、降雪によって地上に沈着したと考えられています。このため、白河市の西半分が強く放射能汚染



(写真1) 伊達市特定避難勧奨地点での活動拠点場所。中央奥に蔵王連山を望む。



(写真2) 白河市での小学校高学年対象の放射線学習会風景。生徒の質問にもわかり易く説明することができました(中央奥:坂口)



(写真3) 白河市放射線学習会での学校のグラウンドの事前汚染調査風景。真夏の暑さにも負けず放射線測定をしています。(写真は測定中の筆者と白河市役所職員)

### おわりに

原発災害から2年半以上経過した現在では放射能汚染状況も明らかにされてある程度落ち着きを取り戻しつつあります。しかし、住民の中には依然として不安を抱えた生活を余儀なくされている方もいます。放射線に対する不安に何もすることができない、あきらめにも似た感情が見え隠れしているように思えます。放射線への不安が消えるには相当の時間がかかるであろうと痛感しています。私は今年度で修了を迎えて支援活動から脱退しますが、今までやってきたことを次の後輩に託し、今後も被災地域の復興に貢献してくれることを期待しています。福島で住民支援活動をしたい心意気のある学生の皆さんを待っています。

され、地域間で放射能汚染・空間線量率に差が生じました。居住空間では震災当時毎時2~4マイクロシーベルトあった空間線量率も現在では毎時0.1~0.4マイクロシーベルトにまで下がってきています。除染作業によって生活環境における空間線量率の低下・改善がされつつありますが、山林では沈着した放射性物質の移動はほとんどみられず、現在でも毎時1マイクロシーベルトを超える環境が存在し

ています。白河市では放射能汚染調査、放射線なんでも相談、幼稚園・中学校における児童・生徒・職員への放射線学習会、放射線O&A作成などの支援活動を行なっています。放射線への不安を抱えた生活は親から子供へと連鎖していき、正常な発育を阻害することになり、地域の将来を担う子供たちへの放射線教育は急務となっています。放射線学習会(写真2)では、放射

線に関する基礎知識をはじめ、白河市の汚染状況、学校の汚染状況、放射線と健康、放射線と向き合う生活方法、など被災地の今と今後を伝えることに重点を置いて説明しています。小学校低学年生対象では紙芝居形式で絵を提示することでわかりやすく説明することを工夫しました。小学校中・高学年・中学生対象では、放射線の単位を含めたいくつかの専門用語も交えて説明し、また学習会前に事前

に学校の校舎内やグラウンドの汚染調査(写真3)を行い、その結果をもとにどのような場所で放射線量が高いかも示しました。生徒の理解や関心は予想以上のものがありました。しかし環境放射能汚染のため屋外で遊び・運動をほとんどできていないので、子供たちの体力低下がみられます。今後の学習会では放射線の話だけでなく遊びを通して運動の実習をし、放射能汚染環境下で運動するにはどう

(※1) 世界平均で、人体はおよそ年間2.4ミリシーベルトの自然放射線を浴びるとされる。1ミリシーベルト=1000マイクロシーベルト  
(※2) 空間線量率: 対象とする空間の単位時間あたりの放射線量  
(※3) 放射性プルーム: 飛散した放射性物質が大気中を雲のような塊になって流れる現象



# 徳島大学の 学生ボランティア

## 徳島市学習支援 ボランティア

総合科学部 人間文化学科 3年

上原 郁美 (うえはらいくみ)



私は、3年生から徳島市学習支援ボランティアに参加しています。この学習支援ボランティアは、通常学級にいる特別な支援が必要な児童生徒に対する学習のサポートを行うものです。毎週1回、徳島市内の学校に行つてボランティア活動を行っています。

視し、授業に付いていけない子や集中できていない子を見つけて、教えてあげたり声をかけたりしています。また、一緒に給食を食べ、休み時間は遊んだり、丸付けのお手伝いをしたりもしています。

私がこの活動に参加したのは、ゼミで勉強している分野が、臨床発達心理学であることと、子どもさんの役に立ちたい!という思いからでした。しかし実際に支援に行つてみると、とても難しく、多くの困難に遭遇しました。何とかコミュニケーションをとろうと話しかけても、返事をしてくれなかったり、目を見てくれなかったりする子もいました。けれど、回数を重ねていくごとに、自分から話しかけてくれたり、お気に入りシールをくれたりするなど、少

に学生が主体となつて行う活動はどうしても運営が複雑になりがちであつたので、団体のまとめ方について考えた経験は、これからの人生にも生きてくるだろうと考えています。

## 薬物乱用防止の啓発 活動を経て

薬学部 1年

木口 美沙妃 (きぐちみさき)



しかし実際にはみがき指導をさせていただくようになり、気づけば中心的に活動するようになり、面接での言葉に嘘はなくなりました。はみがき指導を通して少しでも参加してくださった方のためになつているなら光栄であるし、自分も勉強になったことが多々あり、活動してよかつたと感じています。勉強になるのは歯科の知識に限ったことではなく、活動に理解を示してくださる方との交流や、団体の活動するときのまとめかたといったことも含まれます。とく



はみがき指導ボランティアの様子

11月2日に開催された大学祭で、薬物乱用防止の啓発活動を行いました。薬物乱用防止委員会の一員として、大学祭を訪問された方々に薬物乱用防止への理解度と関心を知るため薬物乱用防止について販売方法や作用、県の対策等の〇×問題を5問出題しました。また、薬学棟ではパネル展示やDVDの上映を行いました。



活動前は心配だったので、声をかけるとほとんどの方が答え

## 宮城県での復興支援 ボランティア

医学部 医学科 5年

小淵 香織 (おぶちかおり)



2011年3月11日、東北地方を襲つた大地震と大津波。当時6年生だった先輩方が有志でボランティアに行くという話を聞き、私も参加を決めました。

実際の活動は4月30日〜5月4日の期間で、宮城県石巻市を中心に行いました。主に行つた活動は、聞き取り調査と瓦礫の撤去作業です。聞き取り調査は、石巻市の沿岸部で独居老人を探すという目的のもと行いました。徐々に避難所が閉鎖された時期でもあり、情報の伝達が一番の問題のようでした。また、被災の状況や親族の有無などによって人々の生活にも差が生じ始めていました。瓦礫の撤去は、お年寄りが多く住む地域では手が付けられず、多くの人手が必要だと感じました。床下や道の側溝に溜まつたヘドロは想像以上に重く、

## はみがき指導 ボランティア

歯学部 歯学科 5年

瀧下 潔 (たきしたきよし)



私は歯科研究会という名前のボランティアサークルで、はみがき指導のボランティアをしています。年3回ほど幼稚園・保育所へ赴いてはみがき指導をさせていた

## 石積み風景保全 ボランティア

先端技術科学教育部  
知的力学システム工学専攻  
博士前期課程 1年

中尾 隼人 (なかおはやと)



### 石積み現状

石積みは、急傾斜地で平らな田んぼや畑を確保するために築かれたもので、石積みが織りなす景観は日本の中山間地の原風景といえます。しかし、近年では崩れた石積みはほとんどがコンクリート擁壁に変更され、伝統的な石積みはほとんど姿を消しています。さらに、職人の高齢化も進み、技術の継承が課題となっています。そのような状況を食い止めるべく、徳島大学の真田純子助教が平成25年3月から地元職人の指導で参加者が修繕作業に当たりながら技術を学ぶ「石積み教室」を立ち上げ、徳島県内の石積み保全に取り組んでいます。私はそこに学生ボランティアとして参加させていただ

### 修復作業

まず、崩れかけている石積みを手際よく取り除いていきます。完全に取終えたら次は、根石と呼ばれる石積みの基礎となる大きな石を置きます。実はここまでの作業が一番重労働で、石積み修復の大変さを一番実感できる作業でもあります。根石を置いた後は職人に指導を仰ぎながら、裏にグリ石を詰め、積み石を積み、という作業を繰り返していきます。裏に詰めるグリ石が重要で、グリ石がしっかり入っている石積みは何百年もつ丈夫な石積みになります。最後に天端石(一番上に乗せる平たい石)を置いて修復は完了します。達成感と心地いい疲労を噛みしめながら、風景に織り込まれた石積み眺めるひと時は、このボランティアのやりがいを感じる瞬間です。



グリと積み石

石積みを崩す作業



# 徳島大学の 学生 ボランティア

## 学生 ボランティア部

総合科学部  
人間文化学科 2年  
**石木 伸之介**  
(いしき しんのすけ)



徳島大学学生ボランティア部の  
主な活動は、児童養護施設に訪問  
させていただいて子供と遊んだり、  
大学近辺でのゴミ拾い活動などを  
しています。また他にも、日本赤  
十字社の方と連携してティッシュ  
配りや看板をつくることでの献血



献血キャンペーン



Kids献血(一般的な献血の流れを擬似的に体験することで、子どもに献血を知ってもらいイベント)

推進活動や、障害者の方のサポー  
ト、警察と連携して防犯を呼びか  
ける活動など他にも多種多様な活  
動をしています。ボランティア活  
動以外にも、合宿や遊びの企画な  
ども多くあります。

基本的に私たちボランティア部  
は外部の方からの依頼を受けて活  
動するので、週に一回の児童養護  
施設訪問以外の活動は定期的では  
ありません。また、ボランティア  
(自発的)ということもあって活動  
は強制的なものではなく、自分の  
したい時にしたい活動だけをする  
というスタンスなので、自分の興  
味を反映でき、あまりサークル活

動に時間を縛られることがないの  
もボランティア部の一つの魅力で  
す。

ボランティア部には約80名の部  
員がいます。ボランティア部のや  
りがいは、広く人との繋がりをつ  
くれることです。これは部員同士  
だけでなく、ボランティアに一緒  
に参加した方や、ボランティアを  
サポートしてくれる人たちとの繋  
がりです。また、ボランティアは  
自分を知るひとつの機会だと私は  
思っています。お金以外にも自分  
にとって何が大切なのかを見つけ  
たい方は、是非ボランティア部に  
足を運んでみてください。



献血推進活動看板づくり

### 学生ボランティア部への 連絡方法等

部活: 毎週金曜日  
18時30分~20時30分  
部室: 常三島体育館1階付近  
入部方法: 金曜日の18時~18時  
45分の間に部室まで見学  
に来てください。

マンツーマン形式です。  
ユニークなのは授業の形だけで  
なく、講師陣も。前井宏之氏は北  
浜国際特許事務所所長、島田尚  
子氏は公益国際知財事務所所属、  
塩川信明氏はニッタ(株)知的財  
産グループのリーダー、中西博行  
氏は日本たばこ産業(株)医薬総  
合研究所知的財産部に所属、香田  
常克氏は(株)トーセ経営管理本  
部所属、と全く縁がないように見  
える5人の共通点は全員が弁理士  
(産業財産権等に関する業務を行う国家  
資格者)ということ。実は出口先  
生も大学の先生には珍しい弁理士  
の有資格者で、講師陣は先生が弁  
理士としてともに学んだ方々なの  
です。

などが見学に訪れ、実際に生徒が  
体験的に授業に参加したりして  
います。

この講座の特長は、授業だけの  
机上論でなく、学生から出てきた  
アイデアで実際に特許を取るとこ  
ろまで持って行くことです。実際  
に特許を取れた例も出てきていま  
す。その基になるのが、文部科学  
省・特許庁・日本弁理士会などが  
毎年主催して開催する「パテント  
コンテスト」「デザインパテント  
コンテスト」です。優秀なアイデ  
アには特許出願の費用などを主催  
者が負担してくれるなど、现实的  
な目標となるコンテンツに合わせ  
た講座なのです。

冒頭、ユニークな授業と書きま  
したが、大学生に求められるのは、  
何よりも社会に出てからの即戦力  
です。社会に出てから、就職して  
から身につける、学ぶという考え  
方は企業や社会にとって大きなロ  
スで、「何のための大学であった  
のか」「大学で何を学んできたの  
か」という雇用側の声もあります。  
もちろん異論もあるかもしれませ  
んが、出口先生の授業は、そんな  
社会の期待にこたえうる、大学とし  
ての一つの方向かもしれません。



## 創造力を カタチにする 知的財産 事業化演習

大学院ソシオテクノサイエンス研究部  
エネルギーシステム部門  
エネルギー変換工学大講座 教授  
**出口 祥啓** (でぐちよしひろ)



出口祥啓先生

ユニークな授業があるというこ  
とで、毎年夏休み中に行われてい  
る出口先生の授業を取材しました。  
教室には5つのグループができて  
おり、それぞれ学生が10名前後、

その中で講師がそれぞれのスタイ  
ルで授業をしています。共通する  
のは、学生が自分たちのアイデー  
アを発表して、それに対して他の学  
生や講師が意見を述べあうという、

また県内でも阿南高専や貞光高校  
と語る出口先生。昨年(2013  
年)は、山形大学から招かれて同  
じような講座を立ち上げました。



島田尚子先生(右) 前井宏之先生(左) 塩川信明先生(左) 中西博行先生 香田常克先生

### ボランティアに関する 相談窓口

学生生活支援課学生支援係  
TEL. 088-656-7086  
E-mail.  
kyseikatuk@tokushima-u.ac.jp



今回の特集を読んでボランティ  
ア活動に興味がありましたか?  
紹介できなかったボランティア  
活動がまだまだたくさんあります。  
「私にできるボランティアは?」  
「勉強やアルバイトで忙しいけど、  
できるボランティアはある?」な  
ど、疑問を持ったら聞いてみま  
しょう。大きな一歩になるはず  
です。

地域社会から国際社会まで、皆  
さんのパワーが期待されています。